

代官所

江戸時代（1603 年～1867 年）には、石見銀山は徳川幕府、すなわち中央政府の直轄領でした。幕府の代表あるいは代官が、要塞化された代官所から銀山およびその周辺の統治を行い、この代官所を中心に大森町が発展しました。代官の責務としては、税の支払い、法と秩序の維持、銀山の開発による産出量および効率の向上を確保することが含まれていました。代官所はこれらの責務を実行するため、主に税の計算や銀の採掘など、特定の分野を専門とする地元の役人を数多く雇いました。

現在、石見銀山の代官所があった場所には、**1815** 年に建てられた門の構造と **1902** 年に建てられた本館があります。実際に封建時代の建物が残っているわけではありませんが、現在後者は資料館となっており、中世から **1923** 年に銀山が閉鎖されるまでの石見銀山における採掘の歴史が詳しく説明されています。資料館には、長年にわたるさまざまな採掘機器の変遷、坑夫やその家族の暮らしぶり、現地役人の仕事ぶり、さらには日本国内の別の場所から新たに石見銀山に赴任した代官や役人が、マニュアルのような巻物を使って事前に任務を学習した様子などが展示されています。